

郷土館だより

V o l . 10, No.3

1988. 3. 10

新聞に見る三島の 明治・大正・昭和(初期)展

3月26日～5月31日

珍しい新聞、写真、資料など約200点を
展示しています。



丹那トンネルの開通

昭和9年12月1日は、全三島町民が待ちに待った丹那トンネル開通、同時に新三島駅開業という二重の喜びにわきかえった記念すべき日でした。静岡民友新聞一面の見出し文字が躍ります。「おお待望の十六年遂に征服…」（写真）祝賀会の賑わいが聞こえてくるようです。昼は旗行列、夜は提灯行列、仮装行列も行なわれるなどの大騒ぎだったと古老

から聞きました。

三島は昔から交通の要所の町と言われてきました。それだけに、初期東海道線が御殿場回りとなり三島を外れた後の打撃は大きく、丹那トンネルの開通は町民の悲願でもありました。この開通によって、三島は乗り遅れた近代交通社会の潮流に、ようやく追いつくことができたのです。

丹那トンネル開通は、近代三島史のエポックメーカーキングな事件と言えるでしょう。

三島宿本陣家史料集(4)

「諸御定宿仮扣」を発刊

三島宿本陣史料集（解続文集）が発刊の運び

となりました。本年刊行の史料集は、通巻4

号で、その内容は樋口家文書の「諸御定宿仮扣（ひかえ）」です。（写真）

ここでは、本史料集をお求めいただき、有意議に利用していただくために、本書の内容の一端を紹介してみたいと思います。



原文書の内容と構成

原文書は次のような内容と構成になっています。まず内容ですが、表題の「諸御定宿仮扣」からも推察されるように、当本陣を定宿としていた諸家並びにその家臣たちの人名一覧簿です。宿場を代表する家柄と格式を重んずる本陣家では、由緒と言って、本陣の常連客である諸大名やその家臣たちとの関係きんがなを、この上なく大切なこととしていたようです。文書は、三島宿本陣（樋口本陣）を利用した多くの人々を、過去にまでさかのぼって調べ上げ、記録しています。次に文書の構成は、人名をいろは順に整理して書きあげた人名一覧簿形式となっています。基本的な記入例をあげると、一行目に人物の国名と役職・次は氏名三行目はその人物が過去に本陣を利用した記録（泊か休、上り下りの別まで）という書き方です。

「大阪具足奉行

伴 藤五郎 様

文政七申二月十五日小田原沼津」

この例文は、最も簡単な記入例であって、詳細なものになると、過去十数回に及ぶ宿泊記録・旅の目的・下賜された金子や物品・本陣からの献上物に至るまでを克明に記している例もあります。このような常連定宿客は、本陣にとってはかけがえのないなじみ客であ

って、暮れの三島暦・盆の塩鮎などの付け届けは欠かせないことであったと思われます。

御定宿の株分け規定

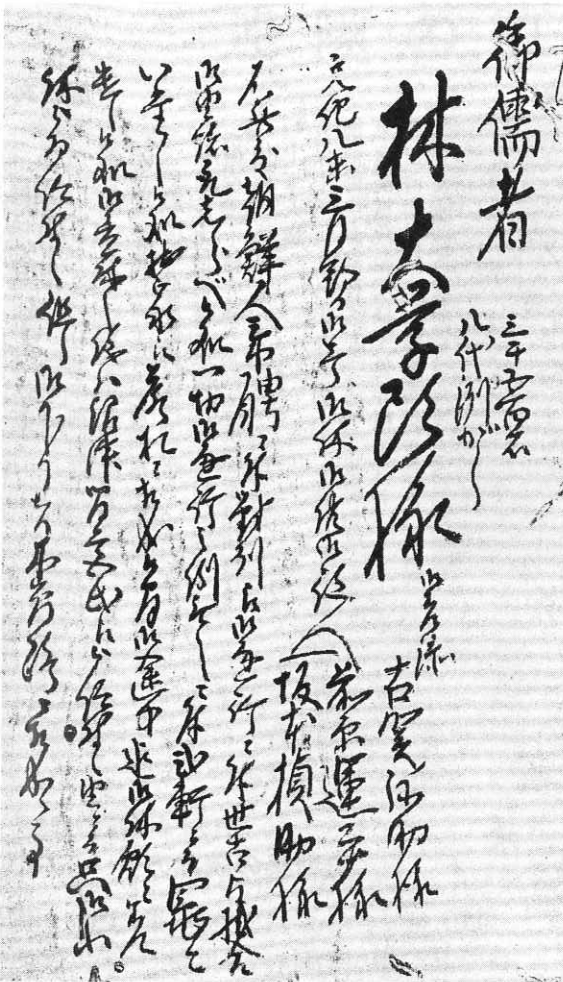
ところで、過去に一度も三島の本陣を利用したことのなかった、いわゆる新しい客は、どのような手続きで本陣の御定宿客となっていたのでしょうか。本文中には、そのような新しい客が来た時の受け入れの仕方までが記されていて興味を引かれます。

新しい客を自分の所の御定宿客とするか否かは、三島宿にもう一軒あった世古本陣との関係で決まりました。つまり早い者勝ちで、勝手に自家の客としてしまうのではなく、両本陣合意の上で御定宿客とするのです。この合意の取りきめを「株分け」と称して、「閩」（くじ）で決定をしていました。平和的な決め方と言えるでしょう。次に「閩」のあった例文をあげて置きます。

例文1（林大学頭様）

儒学者として知られた林家の大学頭と差添3名が、文化8年未3月朔日に、休んでいます。旅の用件は、朝鮮人の来朝があるので対島まで出向くという重要な任務をおびての旅でした。休みたい旨の先触れを受けた樋口家

—例文1の原文書(左)と
その解読文(下)—



では、さっそく世古家に「掛合」(相談して)、
両本陣と林家の由緒を調べています。しかし
両家共に過去一度も関係が無かったため、2



ひろば

郷土に関する本が相次いで発刊されていま
す。

- ◎ 三島いまむかし1(水・道・小祠)=秋津亘
(郷土館運営協議会委員)著。

長年三島に住まわれている著者が、河の
水音を頼りに足で調べ上げた三島の河川の
話、由緒ある小路・祠の話等。水の都三島
の面影を語る調子は郷土愛にあふれていま
す。

御儒者
三千五百石
八代州がし

林 大学頭様
御差添

文化八未三月朔日御上り御休御供御役人
(前原運平様
坂本損助様)

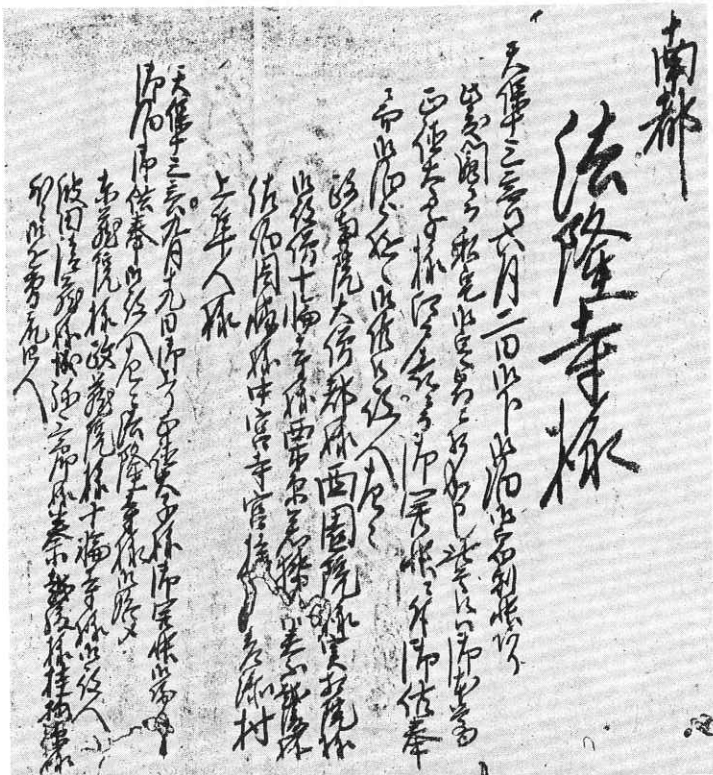
右此度朝鮮人來聘ニ付對卅江御通行ニ付世古ト掛合
御由緒取しらべ候処一切御通行之例無之ニ付貳軒にて閨ニ
いたし候処拙家江落札ニ相成候間御途中迄御休願ニ差
遣し候処御昼休之儀ハ沼津間宮氏江被仰付候由ニ而只御小
休被為仰付候但し御下り者木曾路ニ相成候事

軒が閨くじを引き合いました。結果は、樋口本陣
が落札し、以後当家の御定宿客として記帳さ
れたのでした。因みに、林大学頭一行は、対
島からの帰路は木曾路を通っているのです、三
島本陣の利用はこの一度限りとなりました。

- ◎ 富士・富士宮・沼津・三島・駿東歴史散
歩=辻 真澄(郷土館古文書講座講師)、他著。
史跡めぐりに持ち歩くのに最適の本。各
地域の主な史跡を、地図・カラー写真入り
で歴史的背景などを、くわしく解説してい
ます。
- ◎ しずおかの博物館=静岡県博物館協会編。
県内の郷土館、美術館、博物館、科学館、
植物園など121館園を、収録。特徴・利用
案内・地図等を付けた、わかりやすい案内
書となっています。

例文 2 (法隆寺様)

▼原文書



▼解説文

南都

法隆寺様

天保十三寅六月二日御下御泊御宿割帳あり

此度闇ニ而私宅御定宿ニ相成申候此節ハ御本尊

正徳太子様江戸表ニ而御開帳ニ付御供奉

ニ而御泊被遊候御供御役人左ニ

政南院大僧都様 西園員様 実相院様

御役僧十輪寺様 栗原若狭□秦越後様

佐伯因幡様 中宮寺宮様 □差添村

上隼人様

天保十三寅九月十九日御上り正徳太子様御開帳御帰り

御泊御供奉御役人左ニ法隆寺様御始

東藏院様政藏院様十輪寺様御役人

波田清藏様城弥三郎様秦越後様桂□□様

外ニ御近習衆四人

史料集の読み方

天保13年寅6月2日には南良法隆寺の一行が宿泊しています。この時も、両本陣は株分けの闇を引き合っています。法隆寺一行の用件は「江戸表で正徳太子様御開帳される」というものでした。一行は、3ヵ月半後、帰路再び宿泊しています。

以上見てきたように、史料集是由緒一覧名簿であるため内容は一見単調であるが、内容の一件一件を掘り下げて読んでみれば、そこには実に興味深い問題が発見できます。じっくりと、味わいながら読んでいただきたいと思ひます。

三島曆展の反響

正月3月から3月6日まで開かれた「三島曆と日本の地方曆展」は、私たちが考えてた以上の反響を呼び驚いています。報道関係の皆さんのご協力をいただいたこともあって、県内はもちろん、全国的規模での入館者がありました。中でも、東京に本部を置く曆の会（会長＝岡田芳郎女子美術大学教授。会員約100人。全国の歴史学者、天文学関係者等で組織）がその総会を兼ねて見学に来たこと。東京都文京区の大和路会（歴史を学ぶ婦人の

グループ）30人が来館。いずれも郷土館見学後市内の史跡（時の鐘、大社、河合家、柿田川等）を訪ねています。



三島駅電話ボックスから郷土館への道順を聞いた人、山梨から図録をとる人、石巻市文化会館職員、たまたま郷土館に入り、京曆の展示に親しみを寄せた京都の婦人。それぞれに三島曆と三島の歴史の古さに感嘆していました。

連隊の町——三島(2)

文教町²⁵⁶鏡坂に広がるいちょう並木は、初夏には新緑の香気を漂わせ、晩秋には黄金色に色づき、人々の目を楽しませています。

この並木は、連隊の移駐を記念して、三島町在郷軍人会が大正9年に桜の苗木(そめいよしの)を植えたのが初めと伝えられています。翌10年にはいちょうの苗木が植えられ、後々まで、同会の手で補植、手入れされたため、よく保存されました。戦前までは、桜といちょうの並木となっていました。しかし、桜の寿命が短いため、現在はいちょうだけの並木となっています。

連隊の日常生活は、戦争に備えた軍事訓練でしたが、市民との接触もありました。

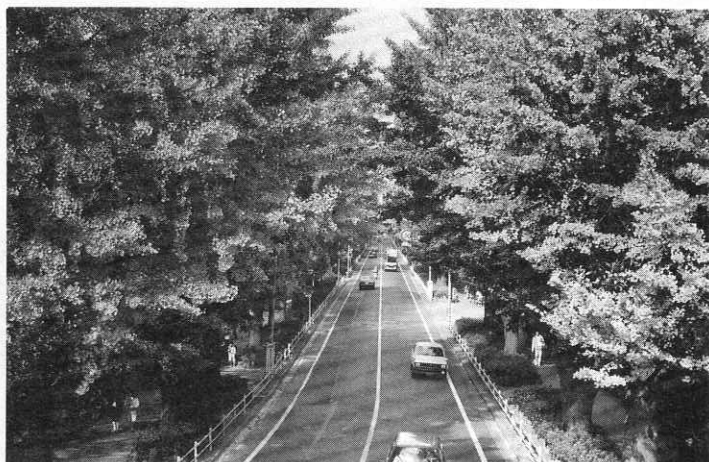
連隊の創立記念日

1年に1回、人々が自由に営門に入れる日です。旗で飾られた営門をくぐると、日頃いかめしい兵士達も、この日のために仮装して迎えます。子供たちはこずかい銭を持ち、売店へ急ぎます。町では買えない珍しいものが買えるのです。連隊と、市民との楽しいお祭りでした。

連隊は、非常時の市民生活の安定にも大きく貢献しました。

大正12年9月1日の関東大震災では、東海道線が不通になったため、開通したばかりの箱根越えの国道一号線(同年6月完成)の復旧作業に従事し、4日には、自動車の通行を可能にしました。砲車等で食料を箱根まで届け、青年団等と共に、関東からの避難民を三島の救護所まで送り届けています。

北伊豆地震(昭和5年11月26日)では、三島町・伊豆長岡町を中心に大きな被害をもたらしました。(死者258人、負傷者1,024人、住宅全半壊9,315戸)倒壊した家屋から人々を救助し、道路の復旧作業にあたるなど、救助活動に活躍します。



▲文教地域の象徴となったいちょう並木

火災発生時も、消防団と共に消火に出動しています。

このように、非常時に頼りになる連隊の存在は人々にとって大きな心のよりどころでした。

連隊の移転日について

郷土館では、現在新聞資料を調査しております。

この中の、大正5年11月9日付「静岡民友新聞」では、10日に新設旅団の歓迎大祝賀会、11日に煙火競技大会を催すとの記事がありました。さらに山階宮が新設の第二連隊に入隊され、将校集会所内の貴賓室を宿舎に充てられるというものです。

従来資料では、二連隊の移駐日は大正8年11月となっており、新しい発見でした。

また、従来移駐日とされている大正8年11月7日付「静岡民友新聞」には、「三島町新設重砲兵旅団第二連隊移転は去五日を以て全部終了したる」とあります。ちなみに当時の規模は「鈴木旅団長、城見連隊長以下将校士卒363名、馬匹301頭、火砲車両91、兵器其他9,183点」となっています。新聞によると三島町では歓迎門を建設し、山車・屋台を引き廻し、仮装し、旗行列・提灯行列を行なうな

ど大歓迎ぶりを伝えています。

おそらく、大正5年に、連隊の施設の一部旅団本部・将校集会所等が出来、使用され始め、8年までに、全施設が完成し、移転が完了したものと思われます。

上海事変・日中事変へ

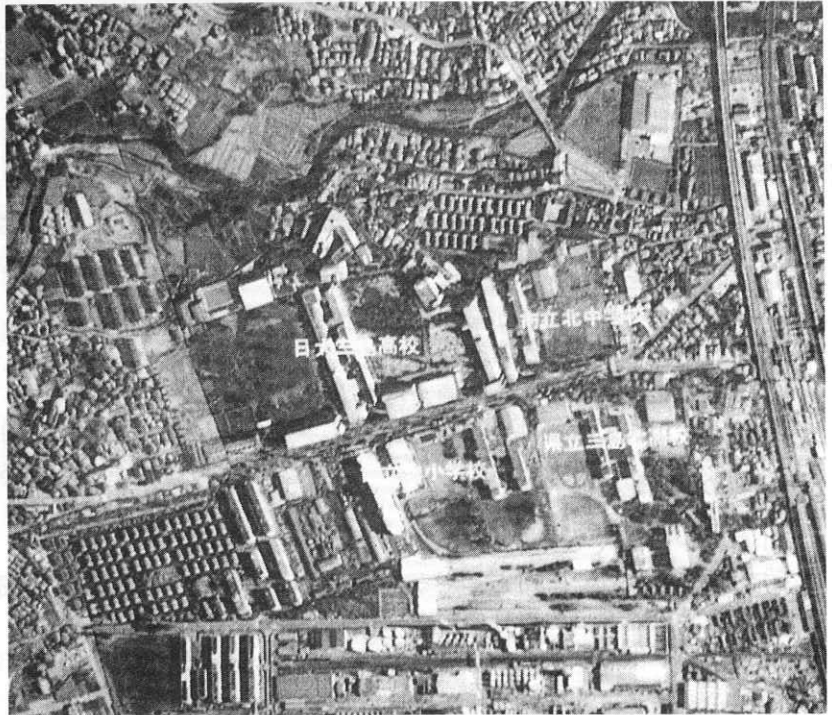
三島の連隊は、昭和7年2月上海事変へ一

個大隊が出征したのを始めとして、12年7月の日中事変が発生するや、ただちに二・三連隊合わせて約4,000人の兵士、3,000頭の馬が動員され、中国大陸へ渡ります。以後、日本が戦争の泥沼にはまり込む中、三島の連隊は部隊ごと中国大陸奥地へ、あるいはビルマ・東南アジア・フィリピン等へと配属され、戦い、終戦を迎えます。

文教地区 への変容

昭和20年8月の終戦と共に、軍隊は武装解除され、連隊の跡地は官有地とされ、後に払い下げられました。

三島の連隊は、戦災に逢わなかったため、大学等が焼失した建物の代替地を求めて、移転してきました。今日の文教地区への経過を簡単に述べてみましょう。



① 日本大学三島学園

21年4月に、旧野戦重砲九部隊跡(二連隊)に日本大学予科がおかれしました。これが24年の新制大学移行により、日本大学教養学部となります。25年に、短期大学経済科を併設し、33年4月から文理学部(三島)および日本大学三島高等学校を開校します。

34年に短大栄養科が発足、54年には国際関係学部が発足し、後に大学院も設置されます。教育と学問研究の府として充実した学園を形成しています。尚63年4月からは文理学部が東京へ移転する予定です。

構内の東には、二連隊の将校集会所が、残っています。窓の高い白亜のしゃれた建物は、現在連隊時代をしのばせる唯一の建物です。

連隊跡も文教地区として大きく変っている。
航空写真＝昭和55年撮影



▲二連隊の将校集会所

② 市立北小学校

昭和24年11月7日、市内4番目の小学校として現在地に開校しました。ここも又、旧兵舎を改築したものでした。

北小内に残る三連隊営門▶



③ 静岡大学教育学部 三島教場

戦後、静岡師範学校女子部が、旧野戦重砲十部隊跡(三連隊)に移ってきました。(現在の三島北高の位置) 24年4月の学制の改革により大学に昇格し静岡大学教育学部三島教場となり、27年3月末に、静岡市に移転します。

⑥ 静岡県立教育研修所

県教育進展のための調査、研究、研修機関として、昭和23年4月に静岡に設置されましたが、31年4月に、兵舎跡を国から借り入れ、現在地に移転しました。

④ 県立三島北高等学校

大社の北、宮町にあった北高は、広い敷地を求めて、昭和32年5月、現在地へ移転しました。

社員研修センター
三島分所

⑦ 東海鉄道旅客株式会社

昭和17年9月に、国鉄熱海工事事務所に設置された隧道技術講習所が、21年4月に三島鉄道教習所として移転しました。62年4月JR東海に移管されました。

⑤ 三島市立北中学校

昭和22年、新制中学校、三島市立第二中学校として設立されました。初めは第九部隊跡(二連隊)の兵舎がそのまま利用されます。27年北中学校と改名されます。校門とその脇の哨舎=写真は、わずかに連隊当時をしるばせるものです。

⑧ 三島簡易裁判所

昭和22年、裁判所法制定と共に、静岡県内11か所の内の一つとして、現在の場所に設置されました。

⑨ 検察庁

昭和22年5月3日、日本国憲法の施行とともに裁判所から分離独立しました。

⑩ 国立東静岡病院 三島分院

大正8年に設立された三島陸軍病院は、昭和20年の終戦にともない、同年12月国立三島病院として生まれ替わり、市民の医療機関となりました。しかし、その後に統合されて、国立東静岡病院三島分院となり、さらに、清水町長沢へ移転したため、昭和46年3月で診療を停止しています。

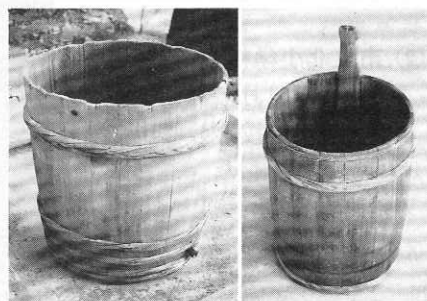
後に土地は三島市へ買却され、市民グラウンドとして利用されるとともに52年12月に市の体育館が開設されました。



■収集資料紹介

～醤油桶等を寄贈～

資料名	点数	受入日	提供者	
醤油桶	3	63.2.29	市内大場48-1	杉山 浪子氏
膳	11	〃	〃	〃
曲げ物 セイロ	1	〃	〃	〃
湯 タンポ	1	〃	〃	〃
S P レコード		〃		〃



▲醤油桶

上記資料は、大場の杉山浪子さんから寄贈を受けたものです。主な資料は醤油桶3点です。杉山さん宅は、マルジュ(寿)ショウウという商品名で親しまれた醤油醸造を3代続けてきた家でした。昔は酒も造っていて、三島大社へも奉納していたそうです。販路は主に田方方面でした。醤油屋は戦後間もなく止めたが、記憶に残っていることは昭和5年11月26日の北豆地震の事だそうです。地震で醤油の桶が倒れて、店やら倉やら一面しょうゆの海になってしまったそうです。



郷土館歴史講座 (報告)

今年度の歴史講座は、日本大学三島学園のご協力をいただき、近世伊豆の歴史・民俗に関する講座を開催しました。受講生73人。

「江戸時代の支配と生活」

講師、蔵並省自 日大三島学園長。9月5日。

江戸時代の特徴をダイナミックな歴史観を展開されながら、歴史がくり返す、普遍的真理について話されました＝写真。

「江戸時代の三島の街並み」

講師、加藤雅功助教授。10月3日。明治以

降の地形図や、江戸時代の絵図等から類推された地図を作製、近世以前の三島の集落としての発展を講議されました。

「地方史と『随筆』」

講師、上保国良助教授。11月7日。資料としてはあまり価値を認められていない随筆に、正史に語られていない真実が伝えられている例を愉快地講議されました。

「江戸時代伊豆地方の庶民の生活と信仰」

平野栄次 三島学園事務局長。12月5日。伊豆を、町、農村、山村、漁村と分け、各地域の衣食住、ハレ・ケの日の生活、及び年中行事を詳細に講議されました。

郷土館運営協議会委員

郷土館の円滑な運営を図るため、郷土館に運営協議会を設けています。委員は次のかたがたでアドバイス等をいただいています。

秋津 亘(南本町17-14) 秋山直樹(初音台5-1) 池谷節子(徳倉734-9) 石井 久(大社町16-26) 久保田和義(委員長＝南本町13-36) 齊藤 宏(函南町柏谷955-12) 重山芳計(清住町3-25) 鈴木辰己(夏梅木872) 世古祐三(函南町間宮799-2) 中山久子(芝本町11-26) 横 茂彦(韭山町寺家28) 望月一夫(副委員長＝光ヶ丘8-15) 伊出 勝(市経済部長)。

郷土館だより No.30

昭和63年3月10日発行

(年3回発行)

編集 三島市 郷土館
住所 〒411 三島市一番町19-3
(楽寿園内)
TEL 0559-71-8228
発行 三島市教育委員会